

政治化されたハムレット ——大岡昇平『ハムレット日記』再読

石 塚 倫 子

I. はじめに

大岡昇平の『ハムレット日記』は昭和30年5月から10月、『新潮』に連載された後、25年を経て昭和55年9月「オフィーリアの埋葬」の章を加え、若干の修正が施された後、新潮社からはじめて単行本として刊行されている。この作品は完成の機が熟すまでそれだけ長い期間を要しただけでなく、そもそも作家がはじめて構想を抱いたのが執筆から遡ること6年前の昭和24年のことであった。本人の後記によると、執筆に当たっては『ハムレット』に関する文献を読み漁り、海外旅行中もこの作品の上演を観るなど、常に頭から『ハムレット』のことが離れなかったと述懐しているところから（『大岡昇平集4』、143頁）、大岡昇平のこの小説にける意気込みは相当なものだったことが窺える。

しかし、その意気込みに反して『ハムレット日記』の評価は大岡昇平自身の作品群の中でも、日本のほかの文学者の『ハムレット』翻案の中でも、あまり芳しいものではないのも事実である。原作との違いの主な点は、シェイクスピアの地理的、時間的不整合を改変し、さらに原作において解釈が分かれる問題点（亡霊の解釈、黙劇の反応と効果、ガートルードやオフィーリアに対するハムレットの真意、第4独白の解釈など）にも辻褃の合う説明を加えている点である。ところが、実際は大岡昇平らしいこの古典主義的合理性や緻密な補完が逆にこの作品をつまらないものにしていて、という評もある（河合、51頁）。確かに作者以前に『ハムレット』翻案を試みた志賀直哉の『クローディアスの日記』（大正元年）、小林秀雄『おふえりや遺文』

(昭和6年)、太宰治『新ハムレット』(昭和16年)のどれと比べても、作品自体の面白さや深みがなく、あまりに理論化された『ハムレット』にわれわれは興醒めな思いにとられるのも事実である。

しかし、大岡昇平があえて原作の味を犠牲にしてまで徹底した合理性を与えた背景には、彼自身の強烈な戦争体験と批判精神があることを知らねばならない。激動期の国家体制に翻弄された日本人のひとりとして、大岡昇平は社会の動きや政治の裏側のメカニズム、そこで犠牲となる人々を常に冷徹な眼差しでみつめていた。『俘虜記』(昭和23年)や『野火』(昭和27年)、『酸素』(昭和30年)などの作品にもその姿勢は明らかである。ここでは、これらのことを踏まえてシェイクスピアの原作に加えた改変を見ながら、大岡昇平の『ハムレット日記』の政治性に焦点を当てて作品を再考したい。

II. 外交問題とフォーティンブラス

『ハムレット日記』の冒頭は、亡き父の亡霊の噂から始まるが、原作と違う点は、その父王のノールウェイとの戦い、そこから得た船舶通行税に関わるデンマークの利権、その後の両国の緊張関係がハムレットの日記に詳細に描かれていることである。日記はさらに、ノールウェイ王の遺児・フォーティンブラスが現在、「度重なる失地回復の要求」(4)⁽¹⁾をデンマークに申し入れており、これに対し新王のクローディアスは「ポーランドの好餌をもっていざない、ノールウェイ軍に領内通行の許可を与えることによって、戦争を回避」(4)するという策をとっていること、しかし、ハムレットの見るところ「この外交的処置は一時を糊塗するのみで、将来については害のみ多くして益少なきもの」(4)であり、「隣国侵略に加担することによって、内外の信頼を失う不利はさておいても、他国軍に領土通過を許すとは、国の体面にかかわる一大事」(4)であるということも指摘している。

原作ではあまり中心的話題ではなかった武装したフォーティンブラス軍の領土通過の問題は、『ハムレット日記』ではかなりの頻度と重要性をもって描かれている。そのクライマックスはフォーティンブラスとハムレットの直

接の対面シーンであるが、これはシェイクスピア作品にはない全くの大岡昇平の創作である。原作のハムレットはイギリスに向かう途中でフォーティンブラスの一行を遠くからたまたま目にするが、部下に確認するだけでやり過ごすという設定になっている（4幕4場 9-14行）⁽²⁾。ところが、大岡昇平はハムレットとフォーティンブラスを直接対面させ、互いの力量と思惑を探り合う緊張した場面を新たに創り出している。そのきっかけはハムレットがフォーティンブラス軍の軍備と数を目の当たりにして疑問を持ったところから始まる。

一つの考えが浮かんだ。城内への招待をこぼんだ傲慢なフォーティンブラスといえども、私が会見を申込みば、まさかいやとはいまい。(78)

……私の目的はフォーティンブラスの真意を探るにある。イギリスへ追払われようとしているにしても、私はデンマークの王子である。この国の社稷しやくを憂う心を失ってはいない。協定外の攻城砲を持っている以上、フォーティンブラスの本心をたしかめずに、この国を去る気にならぬのだ。(80)

やがて本陣に尋ねていくとフォーティンブラスは「濃き眉の下より眼を光らして、探るようにこなたを窺う」(81) 男で、ハムレットが叔父クロードアス王の反逆の疑いや父の亡霊の話、その後積み上げられた証拠について語り、デンマーク攻略をそそのかしてみると、「一国の王子の弑逆に（ここでフォーティンブラスの眼は光った）加担すべきかどうか」(85) について異議を申し立て、飽くまでクロードアス王との協定を守りデンマークを攻める気はないと断る。そして、「私がそれほど復讐の念に固っていたら、ハムレットの名を持つ者とうち打ち解けて話していないでしょう（ここでまた彼の眼は光った。）私の望みはもう少し大きいのです」(85) と述べる。この「望み」が何であるかは後に明らかとなるが、ここではハムレットのイギリス行きに忠告を与え、「お相手していたのが、俊敏な王子であったことがわかり、私

は満足です。」(87) とハムレットを褒めることも忘れない。さらに、ハムレットの会見の目的について「攻城砲の作戦企画を探るために、できもしないエルシノーア城攻撃をすすめてみられるとは。お城に十分備えがあることは、私とても存じておりますよ。」(87) とすっかりその真意を見抜いている。大岡昇平の描くフォーティンブラスはハムレットより一枚上手の政治家であり、自分の取るべき道を常に計算の上、相手を見ながら巧みに対応するマキアヴェリストとして描かれている。

大岡昇平は後記において、「父の讐を討つと共に、デンマークの王座をねらうマキャベリストのハムレット、その試練と没落を描こうとした」(144) と述べているが、実は真のマキアヴェリストはフォーティンブラスであることは、最後の土壇場で「ポーランドばかりか、ロシアまで遠征することをたくらむに到った」(134) と述べるホレーシオの手紙で明らかになる。フォーティンブラスとハムレットを鏡像関係とみなす解釈もあるが(清水徹『大岡昇平集4』解説、534頁)、鏡像と言うより、フォーティンブラスはナイーブなハムレットよりずっと割り切った帝国主義者であり巧緻な政略を持つ現代的な政治家である。これに比べハムレットが父のような政治を理想とする古い世代の理想主義から脱却できない点で、原作同様彼はマキアヴェリストにはなりきれなかったし、それが彼自身を苦しめる一つの原因ともなっている。

また、大岡昇平はフォーティンブラス軍の国内通過の発想が「聯合軍によって占領された戦後の経験」から生まれたことに言及しているが(『大岡昇平集4』、145頁)、作者は終戦後のGHQ体制下で日本が脱軍国主義を実現させていくプロセスを目の当たりにしたひとりであった。占領軍上陸前のデマや恐怖はなくなったとはいえ、彼らの進駐は当時の国民にとっては緊張を伴うものであったことも事実である。マッカーサーを最高司令官に、綿密に組み立てられた戦後日本の再建計画は、言論統制や戦犯容疑者の逮捕と裁判、新憲法の制定を通し、日本の天皇制ファシズムと帝国主義の解体を強力に押し進めるものであった。こうした外国からの政治介入と統制は日本にとって

はじめての経験で、『ハムレット日記』のフォーティンブラス軍の領地侵入に対するデンマークの緊張感は、大岡昇平にとってはクローズ・アップすべき必然性が十分あったものと思われる。大岡昇平は、ハムレットの死後フォーティンブラスがすぐさま城に乗り込んできて現実的な事後処理に着手し始める成り行きや、他国の干渉に對しうまく折り合いをつける政治的手腕を書き足しているが、マッカーサー元帥率いる占領軍の戦後の政策をそこに重ねて創作したと仮定すれば、フォーティンブラスがなぜ『ハムレット日記』ではキーパーソンとして機能しているかが理解できよう。

Ⅲ. デンマークの政治とブルジョア

さてこうした外交問題とともに、『ハムレット日記』は国内情勢にも現実的な創作を加えている。原作にはないが、大岡昇平の作品ではハムレットとホレシオが町の様子を見物に行ったある日の描写がある。

港は入江の対岸にあって、大手前のクロードィアスの武器製造所の傍から渡る。あたりの水面は夥しい軍船で埋まっている。近く五里北のフォンゲ岬へ着くはずの、フォーティンブラスの軍隊を積んだノールウェイの軍船への備えである。(38)

城下の港は武装したノールウェイの国内通過を迎えるにあたり、万が一に備えて軍船がひしめいている。先に述べた国内の緊張に加え、こうした軍事費の浪費をハムレットはクロードィアスの君主としての手腕の欠如とみなしているが、『ハムレット日記』のクロードィアスは自ら武器製造所を独占的に経営することで、当面の戦争を回避する間に軍備を強化するとともに、この軍需産業の見返りをしっかり懐に収めることを忘れない。

またこの物語にはもうひとり金儲けを常に念頭においている人物がいる。王室顧問官のポローニウスは原作と違い「エルシノーア港のブルジョアの支持によって、宮中に地位を得た富裕な郷士である」(3)、つまり貴族ではな

くブルジョア出身の商人となっている。当然のことながら、ポローニウスは政治家の立場を利用して、ブルジョア商人たちに利益が転がり込むようさまざまな便宜を図っているのだ。それがハムレットの眼には不快に映る――

これら商人たちは安く買い高く売る術策、つまり偽善の習慣で宮廷を汚染した者共である。そして無論新王とポローニアスの平和政策の支持者である。それが彼等の通商の安全を保証するからだ。戦争も準備するだけなら、商人たちの利益は増大する。文句はいわない。

ただ武器製造所については、一身同体と思われていたクロードィアスとポローニアスの間にも、対立が開始したということだ。即ちクロードィアスはエルシノーアの町中の鍛冶屋を大手前の武器製造所に徴用したが、ポローニウスによれば、この処置は、全国的に車軸と蹄鉄の不足を来し、国内の運輸を麻痺させているという。先日、息子のレアティーズを小銃購入のためフランスへ派遣したのは、国内の鍛冶屋の負担を軽減するためだと称している。しかし彼がそれほど国民のためを思う愛国者と信じる者は、デンマークには誰もいない。

彼はクロードィアスが彼の手を通して、町の鍛冶屋へ発注しなかったのが、不満であるだけなのだ。そして彼がこれほど蹄鉄のことにこだわるのは、輸送困難によるからす麦の集荷の支障もあるが、それ以上に彼の庇護の下にある伝馬問屋の利益を慮るからにはかならない。(40)

商人たちにとって大切なのは金儲けだけであり、戦争の脅威も場合によってはいい商売になる。フォーティンブラスの国内通過を巡って軍備を整えるクロードィアスの下で、商売のチャンスを狙う彼らのあざとい哲学と欲の張り合いを描くことには、実は大岡昇平が戦中勤めていた軍需産業の花形、帝国酸素株式会社と川崎重工での経験が大きく影響していよう。

小説『酸素』は大岡昇平が一時期、作家活動に意欲を失い帝国酸素に入社したころのこと(昭和13年から18年)を題材にした作品である。当時、酸

素は圧縮してボンベに詰めて販売していたが、アセチレンガスと混合すると高温を発するため、造船造機工業が鉄を加工する際に不可欠の製品で、軍需工場からの需要が大きかったと言われる（ゆり、131頁）。大岡昇平は事実上フランスが実権を握っていた頃の帝国酸素に翻訳係として雇用されるが、やがて会社は太平洋戦争の激化とともに海軍の強引な支配へと変換する。小説の中では登場人物たちが政治的力学の中にいやおうなく巻き込まれ押し流されていくプロセスが描かれているが、大岡昇平もそのひとりであったことは事実であろう。実際、帝国酸素に居場所のなくなった大岡昇平は知人の紹介で今度は川崎重工に移る。しかし、皮肉にもここはさらに軍閥政府と政商による政治支配のカラクリが透けて見える職場であった。

当時の軍部は戦況の実態を国民に隠しつつ、恐るべき割合で国家予算を軍事費につぎ込んでいたが（ゆり、150-51頁）、川崎重工は艦船製造を担い最も戦時中に膨れ上がった会社である。大岡昇平は資材部に配属され、海軍省と資材の割り当て折衝を担当するが、そこで彼が知るのとは日本が戦えるだけの体力を持たない危機的状況にあるということであった。軍閥政府は国民に多くの犠牲を強要し、もはや勝ち目のない戦いに国費の大方をつぎ込み、一方政商たちは軍需工場を通して独占的に利益を貪っていたのである。ポーニアスやブルジョア商人たちの利権争いには、政治の裏側を見てきた大岡昇平の鋭い眼差しが反映している。戦後マッカーサーが日本帝国主義の経済的支柱となっていた財閥組織を解体することで侵略計画を骨抜きにしようとしたのも、このシステムにメスを入れるためだったのだ（相良、204-08頁）。

しかし、『ハムレット日記』が書かれたころの日本は朝鮮戦争の特需景気で再び軍需産業が興隆し、経済危機を乗り越えることとなる。また、戦争を放棄しながら日本の米軍基地はアジアでの戦争の拠点となり続けることも黙認され、その米軍基地の周辺はさまざまな商売が成り立っていく。『ハムレット日記』では、エルシノーアの港には「ノールウェイ軍やそれを運ぶ船員をあて込んだラム酒は町に溢れているし、父上の存命中はエルシノーアから追放されていたいかかわしい女たちの大群も、どこからか移動して来たという

ことだ」(40-41)という描写があるが、これは米軍相手の商売が基地の周辺に多数、出現したことを反映している。大戦中の会社勤めで知った軍部のでたらめな戦略、そして出征してから軍国主義教育によって死ぬまで戦うことを強要され、フィリピンの激戦区で飢えと渇き、病と傷の痛みに苦しみながら命を落としていった同胞への思い、さらに戦後の占領軍と日本の政治姿勢を目の当たりにした経験、これらのことから大岡昇平の冷徹な眼差しは350年前のシェイクスピアの名作を、かなり現実的な政治世界に書き換えていったことが理解できる。

IV. 監視と狂気

以上のように、『ハムレット日記』の政治的状況は原作以上に現実感を伴って一国の王子ハムレットに深刻な懸念や憤りを与えているが、何より王子の悩みはクローディアスに対する父殺害の疑惑にある。原作どおりハムレットは証拠を掴もうと必死になり、クローディアスや周りの廷臣たちを疑惑の眼差しで監視する。ところがハムレットの日記を読み続けると、最も監視されてその眼差しに怯え傷つくのはハムレット自身であることが次第に明らかになる。原作ではクローディアスとポローニウスはハムレットの真意を確かめようと、オフィーリアを囮に使い物陰から二人の様子を伺うシーンがあるが(2幕2場162-64行)、ハムレットが実際にこの監視に気づいていたかどうかテキストには書かれていない。しかし、大岡昇平のハムレットは帳の向こう側の眼差しをはっきりと意識し、それが一層、エルシノーアを圧迫感に満ちた世界にしている。

広間に人影はない。しかし広間の西側の、ヴェネチアより舶来のヘルメス像をおいた壁龕が、厚い帳へきがんで蔽とぼりわれているのに気が付いた。そこはいつもは蔽われてはいず、昨日ここを通った時は、帳は引いてなかった。

もし、誰かがそこに隠れているとすれば、それは王かポローニウス、ローゼンクランツ、ギルデンスターン、四人の中の一人である。そして今、私

の前で悲しみを装っている乙女がその手先であるならば、女は憎むべきである。(32-33)

この場面のみならず、叔父の依頼したスパイ役の学友ローゼンクランツとギルデンスターンをはじめ、母もオフィーリアも廷臣たちも民衆も、外国の王子フォートインブラスをはじめ周りの国々までが常にハムレットの動向に注目し、監視の眼差しで彼を縛り付けている——少なくともハムレットはそう感じている。そして仕舞いに亡霊たちまでがすべてはお見通しだと言わんばかりにハムレットの不始末を叱り、なじり、諭しに現れる。ハムレットはこの監視を意識し、演技せざるを得ないのである——「以来私は人から見られているのを意識せずに、行動したことはなかった」(92)。

この演技をはじめは亡き父の亡霊を見たバナードやマーセラスに偽ったところから始まった。これは本当に亡霊の出るシェイクスピアの原作と違うところである。しかし、皮肉にも父王の亡霊はハムレットの前にやがて実際に現れるようになり、ポローニアスの亡霊、夢の中ではオフィーリアの霊までもが登場するようになる。⁽³⁾ この亡霊たちの登場場面で重要なのは、次第にハムレットは自分が本当に狂ってしまっているのではないかと疑うようになる点である。そして、ハムレットの徹底した不信感の根底には自分自身に対する懐疑があることも忘れてはならない。

クローディアスの疑いは根強いと考えねばならぬ。そもそも私と彼との間は、彼が私を世継王子に指定した瞬間から、危機の状態にあったといってもよいのだ。彼は自分自身を信じないから、私を信じないのである。もっともこれは逆にすれば、私にもあてはまる。私は他人が信じられないから、自分が疑わしくなったのである。(29)

自分が信じられないために、他人を信じる事が出来ない。マキアヴェリストに徹するつもりで他人を欺き策を弄するハムレットだが、根本のところ

で自分の正気が疑わしくなってしまうところが、この『ハムレット日記』の悲劇と言える。実際、原作と違って大岡昇平のハムレットの政治的思惑はすべて予想を裏切ることとなる。亡霊の利用は却ってハムレットを惑わせた。町の劇団を呼んで披露した王殺害の劇中劇は確かに途中まではうまくいくのだが、証拠を掴んだと喜ぶあまりに観衆に向かってしゃべりすぎた大岡昇平のハムレットは、つい空回りしてしまい人々の気持ちを掴み損ねてしまう。

弑逆の疑いがある以上、戴冠は無効であると宣言し、王権の停止を申し渡すべきであった。取りかえしのつかない逸機であった。……(中略)……「乱心」という囁きが聞えた。我慢がならぬのは、女たちの眼に現れた憐憫の色である。クローディアスの攻撃を避けるために、私が取ってきた言動が、この重大なときに却って彼を益することになったのは無念である、私は強弁という、さらにまずいことをやった。(59)

また、イギリスに送られる途中、ローゼンクランツとギルデンスターンの船室から盗み出して改ざんした国書は、原作と違ってイギリスに怪しいと見破られる——「慎重なるイギリスはハムレットが書き替えた国書があまりにも短く、上部を切った跡があるのに不審の念を起し、ローゼンクランツ、ギルデンスターン両名の処刑を延期して、ハムレットの行方をたずねかたがた、使節をエルシノーアによこした」(135)。これらのズレは、ハムレットをさらに深刻な自己の懐疑へと導いてしまう。第4独白の有名な台詞は、『ハムレット日記』では亡霊を見た自分の心への疑いとなっている。ホレーシオは語る。

父王の亡霊も、自分の心が生み出した幻影ではないか、と彼は正しく疑っていた。「ああなのか、こうなのか、それが疑問だ」といったこともあった。(137)

こうして、『ハムレット日記』のエルシノーアは内憂外患の政治的力学の中にハムレットを巻き込み、封じ込め、加えて彼は自らの狂気という閉じられた世界に密閉されてしまう。

V. まとめ

『ハムレット日記』の最後は、ハムレットが復讐を遂げる最後の日の顛末、そしてその後のデンマークについて、ホレーシオが友人に宛てた手紙の形式で語っているところで終る。この部分はシェイクスピアの原作と最も違うところでもある。結論から言うと、デンマーク王をフォーティンブラスに託すという「このハムレットの臨終の意志さえ、実現しなかったのだ」(142)。

確かにフォーティンブラスは事件の直後、ハムレットの遺言どおりデンマーク王家の悲惨な最期の收拾をつけに、というより新たな領地の支配者となるべく素早く現れる。彼の手際は見事だが、加えて彼はここを足場にデンマークで集めた兵を使ってロシアまで遠征することを早速に企む野心家の侵略者であることが判明する。しかし、ことはそれだけでは収まらなかった。ノールウェイだけにこんな甘い汁を吸うことを許してはなるまいと、コペンハーゲンが自由都市を宣言し、ウィッテンバーグのザクセン侯もユトランド半島を占領する。イギリスは国書の偽造を怪しみ、早速偵察をよこしてきたついでに継承権を主張してきた。結局、各国の勢力が牽制しあって均衡を保ち、デンマークは分割統治されることとなる。

大岡昇平はこのデンマーク分割の結末を第三稿で思いついたという(大岡・小田島、172頁)。欲の張り合いはフィクションにおける近代初期の小さな国家から、国際間の規模に広がり、戦後の日本を米英ソ中で分割する話し合いまでも暗示するような現実性を伴っているあたり、大岡昇平らしい皮肉な結末である。

同時にこの手紙は、もはや父王ハムレットのようなヒーローを頂点に一騎打や騎士道精神で世を制する世界は終っていることを物語っている。あるいは時代はすでに負けるとわかっている戦にやみくもに突進することを愛国心

と呼ぶ世界でもない。むしろ情勢の監視を怠らず、損得をよく考えて冷静に駆け引きをするマキアヴェリスタたちの世界である。そこに必要なのはヒーローではなく、巧みな交渉術としたたかさ、すばしこさと冷静さを備えた新しい政治家たちである。

この新世界ではパノプティコンのように、お互いが見えない監視のネットワークの中に組み込まれて政治化されていく。自己を偽り演技をしたり、お互いを監視したりすることに耐えられない人間は古い世界の住人である。ハムレットはその意味で新しい世界にはナイーブすぎて馴染めない。もちろん、そうなるうとして彼は努力し、見事に失敗したのだが。

ホレーシオは『ハムレット日記』ではハムレットより7歳年上のイタリア人となっているが、事件の後も祖国へ戻る気はない。その国はもう輝かしい時代は過ぎている。彼はウィッテンバーグに帰って「大学のささやかな補導教師の職」(134)を得れば十分だと述べる。フォーティンプラスのような野心もなければハムレットのような使命感もない、この小市民として生きる決意のホレーシオにとって、いまさら死んだ友人の狂気の日記など公表するに値しないし、またそうするには余りに生々しい記憶であるため、「王子なんか糞喰え」(137)の心境で彼は日記を焼き捨てるつもりである。イタリアの友人に宛てて書いている手紙は、ほとんどホレーシオの独り言だ。

この最後の設定は『野火』の締めくくりとよく似ている。『野火』の語り手はレイテ島から復員後、比島の女の殺人と、人肉食の誘惑と、壮絶なジャングルの彷徨の記録を、精神病院で日記にしたためているのだ。しかもその話を精神科医は狂人の話としてまともに受け取る意志はない。しかし、狂気の語りで締めくくることで物語は一旦は遠景化されるが、一層真実と悲しみをもって読者に提示されるのである。ホレーシオの語りは同様に、狂人ハムレットの物語を「糞喰え」と引き離しながら、むしろハムレットの狂気を狂気として認めつつも、それでも愛してやまない男——「気が狂っていたが、その人となりには何ともいえぬ優しいものがあった」(137)——の真実の物語として伝えている。

このように、閉じられたハムレットの狂気の世界はホレーシオの語りで二重に閉じられることによって、逆説的なリアリティをもってわれわれの前に開示される。そこでわれわれが見るものは、過ぎ去った時代の再現を夢見て取り残される人間、あるいは新しい時代の功利主義的政治家を指すものどこかに理想のズレを生じ、ついには自滅してしまった孤独な男の物語である。それは中世からルネッサンスへの過渡期に近代主体の空しさを受け入れられずに逡巡するシェイクスピアのハムレットの懊悩とも相通じる。いずれにせよ、ホレーシオの最後の孤独な独り言は、狂人の日記を無限の広がりへと導く。それは精神病院の病室でつづられる『野火』の語り手の手記が、時空を超えてレイテの空にたなびく野火へと読者を導き、戦争という大きな渦の中でいかに人間は卑しく無力で神聖なものかを切実に示したような広がりだ。すなわちハムレットの政治化された世界は、彼の友人の最後の手紙で不思議な現実味をもって今もシェイクスピアの時代から戦後の日本、ひいては現代の日本へとわれわれをいざなっていくのである。

註

- (1) 『ハムレット日記』からの引用は『大岡昇平集4』（岩波書店、1983年）に収められている『ハムレット日記』に拠り、カッコ内の数字はこの版のページ数を示す。
- (2) シェイクスピアの『ハムレット』からの引用の幕、場、行数はHarold Jenkins 編のアーデン版に拠る。
- (3) 大岡昇平はここで亡霊とカトリシズムの問題を解決すべく、さかんに「煉獄」のテーマを話題にする。確かにシェイクスピア時代は宗教改革の後であり、『ハムレット』の亡霊の語る「煉獄」については批評史でも問題になってきたし、大岡昇平がその問題を彼なりの合理主義で解決しようとしたことも事実であろう。この点に関し、ドーヴァー・ウィ

ルソンは宗教改革の後の『ハムレット』における煉獄とカトリシズムの問題に疑問を投げかけている(J.D.Wilson, 51-78)。大岡昇平がウィルソンの批評に大変影響を受けたことは後記に言及されている(『大岡昇平集4』、143頁)。

参考文献

- 大岡昇平『大岡昇平集3』岩波書店、1982年
——『大岡昇平集4』岩波書店、1983年
——『大岡昇平集5』岩波書店、1982年
——「スタンダールの『ハムレット』——漱石と『衣装哲学』」『早稲田文学』第124号(1986.9)：8-15頁
- 大岡昇平・小田島雄志「シェイクスピア閑談」『文学界』第35号(1981.2) 164-177頁
- 大岡昇平・柄谷行人「対談・〈戦争文学とは何か〉」『文学界』第39号(1985)：232-57頁
- 大江健三郎他『大岡昇平の世界』岩波書店、1989年
- 河合祥一郎『謎解き『ハムレット』——名作のあかし』三陸書房、2000年
- 後藤亮「うら若き大岡昇平〈改稿〉」『キリスト教と文学』第2集(1975)：186-202頁
- 相良竜介編『ドキュメント昭和史6——占領時代』平凡社、1975年
- 絳秀実「母という歴史——大岡昇平論」『群像』第36巻(1981.10)：372-88頁
- 中野孝次編『大岡昇平の仕事』岩波書店、1997年
- 樋口覚・奥泉光・井上ひさし・小森陽一「大岡昇平——戦後派、死との全面戦争」『すばる』第22巻(2000.7)：152-199頁
- 藤原彰・今井清一編『十五年戦争史4——占領と講和』青木書店、1989年

ゆりはじめ『大岡昇平論』マルジュ想社、1992年

ヤン・コット『シェイクスピアはわれらの同時代人』蜂谷昭雄・喜志哲雄訳、
白水社、1968年

Jenkins, Harold, Ed. *The Arden Shakespeare: Hamlet*. London:
Routledge, 1982.

Wilson, John Dover. *What Happens in Hamlet*. Cambridge:
Cambridge UP, 1935.